

連合女性委員会

Letter No.13 2003/July

2003年7月7日 発行：生活クラブ連合会/女性委員会 発行責任：牧島佐代子
TEL 03-5285-1883 FAX 03-5285-1839 〒160-0022 東京都新宿区新宿 6-24-20 シグマ東新宿ビル6階

特集 ストップ！GMイネ

昨年札幌で開催した「アジア姉妹会議」において、三者(韓国・女性民友会、台湾・主婦連盟、生活クラブ)はともに「GMイネの商品化に反対するために、アジア女性ネットワークを強めます」と宣言しました。今回は、GMイネを阻止する運動がどのように推進されているのか、各国からのレポートです。

台湾におけるGMイネ

台湾・主婦連盟生活消費合作社

常務理事 黄淑徳

台湾の生物技术(Biotechnology)研究の主な中心地である「中央研究院」、この学術機構と大学の研究者たちは、「黄金米」が人々を飢餓から救ってくれるという神話に興味津々です。台湾の農業は遺伝子組み換え技術を導入しなければいけないと信じているのです。またメディアを通して、遺伝子組み換え技術を導入した新しい生物科学技術の神話を作りあげるのに躍起です。

今年(2003年)1月に、中央研究院は台湾第一号「GM 稲」の研究開発に成功かつ、第二段階第八代目の隔離田んぼ試験に入ったことを発表しました。「甘いこめ」と名づけられたこの台湾第二号 GM 作物は、万一実用化されれば、恐らく台湾初の大量生産・繁殖・加工される GM 作物になるでしょう。「甘いこめ」には澱粉を分解する酵素遺伝子が移植されているため、調理時に澱粉が各種の糖類に分解されます。この糖類が酒や甘味料の原料になるため、台湾の二大製酒メーカーが大変興味を持って実用化を待っているそうです。

「甘いこめ」以外にも飼料用 GM 稲が二つ、すでに実験段階に入っています。一つは Lactoferrin(ラクトフェリン)を作ることでできる稲であり、もう一つは大量 Phytase(フィターゼ)酵素を含む稲です。両方とも離乳した子豚が鉄分不足で貧血になりやすい体質を補充する GM 作物です。

台湾の第一号 GM 作物は Ringspot Virus(輪点ウ

イルス)の抗体を持つパパイアです。これは台中中興大学が研究した技術ですが、数年経ってもまだ実験栽培段階に止まっています。しかし、既に民間に流れ栽培されているという話もあります。GM 作物に対する農民の認識が乏しいことははっきりしています。既に GM パパイアが台湾国内で販売されているかもかもしれません。詳しい表示がないために、消費者は情報を得ることもその情報によって商品を選択することも難しいと思われます。

台湾の GM 食品表示法は 2000 年末に立法化され、2004 年 1 月から実行されます。この法律では大豆とトウモロコシを原料としてつくられた食品に対してしか強制表示されません。他の作物(例えば、パパイア、コメ)に対しては法的規制なしです。かつ飼料に関しても、食品産業界に対する GMO 成分表示の要求は行われず、食品表示法によって厳しい管制が行われるとは言えません。

「黄金米」の特許を持つ会社は、「『黄金米』が人々を飢餓から救う」、「『黄金米』には失明予防の効能がある」と、大げさに宣伝しています。失明を予防するのに十分なビタミン A を摂取するには、グリーンピースの概算によると大人ひとりが毎日 9kg のご飯を食べなければならず、これは正常人の摂取量の 12 倍に当たります。こうした「巧みな欺瞞」は、生物化学技術会社がよく使う手です。「甘いこめ」を研究する担当者は、農民の収入を高める目的で研究開発した

と言っていますが、結局利益を得るのは酒類の加工業者でしょう。

「甘いこめ」の生態性田んぼ評価はたった一年で判断できる（台湾は一年二作ですから）ことから見ると、科学者の予想は楽観的すぎます。2004年から「黄金米」はアジア各地で試作される予定です。また「黄金米」以外の様々なGM稲も特許を申請中であり、田んぼでの試験段階あるいは実験段階に入っています。コメは世界で最も多く食べられている主食です。

ストップ！GMイネの活動と今後の課題

生活クラブ・静岡

理事長 赤堀ひろ子

2000年12月に、九州のグリーンコープ連合、関西生協連合会の3つの生協連合会で始めたこの運動も3年目を迎え、ひとつの区切りをつける時期になりました。昨年の秋の活動として、自治体への請願・陳情活動（遺伝子組み換え稲を承認しないこと 遺伝子組み換え食品の全面表示の義務化を求める 学校給食に遺伝子組み換え稲を使用しないこと）をおこないました。その結果、北海道から鹿児島までの523の自治体（4月2日時点）にひろがり、国への意見書として採択されています。この活動や、多くの消費者、生産者の「遺伝子組み換え稲反対」の思いが結実したのでしょうか、12月5日、愛知県は、モンサント社と共同開発してきた遺伝子組み換え稲の商品化を断念しました。

また、3月14日、横浜で行われたコーデックスBT部会に対する、NGO行動での「遺伝子組み換え食品について考える議員と市民の会」の席上で、農水省などの担当官から、「多数の自治体から「遺伝子組み換え稲反対」「全面表示義務化要求」の意見書が出されていることを認識している」との回答がありました。

一方、コーデックスBT部会では、「遺伝子組み換え微生物利用食品の安全性評価指針案」の議論とトレーサビリティに関する自由な意見交換が行われましたが、微生物についても、遺伝子組み換え植物と同様、環境への放出のリスクは、議論の対象外とし、微生物独自の慎重な安全性評価の必要性は軽視されました。トレーサビリティ（生産流通履歴を追跡できる仕組み）は、トレーシング（追跡すること）と言い換えられ、私たちが求めてきた「予防原則（人の健康や環境に危害を及ぼす恐れのある時には、その因果関係が科学的に立証されなくても被害を予測して未然に対策を採ること）」は、盛り込まれませ

アジアの消費者がいかにおたがいの情報をやり取りして交流できるか、いかに危険への対策を取り行動できるか、農民と私たちがいっしょになっていかに科学者に対して反対の姿勢と論理を展開できるか、私たちの勇気が鍛えられる時です。皆様頑張りましょう。

んでした。しかし、抗生物質耐性遺伝子の使用の禁止や、人の消化器官における微生物への影響を評価することは確認され、輸出国のアメリカ・カナダとそれに追隨の日本に対し、フランス・スペインなどのEU諸国との妥協の産物といえるこの国際基準案は、6月末のコーデックス総会で採択される見通しです。食の安全や、環境を守ろうとする世界中の消費者・市民の運動は終わりなき闘いをし続ける必要があります。

翻って、日本の現状は、岩手県・北海道・茨城県で、遺伝子組み換え稲の隔離・一般圃場での実験許可が出され、その栽培準備に対して地元では、反対運動が始まろうとしています。また、5月13日に、アメリカはEUが進めてきた遺伝子組み換え食品の認可基準や新たな表示制度、それに、予防原則にもとづく食品政策をWTO協定違反の貿易障壁であるとして提訴しました。平和を願う市民の思いを無視して強行したイラク戦争のように、巨大な権力の前で何もできない、変えられない無力感があります。けれど、人と人が連帯して社会をより良い方向に変えていくという協同組合の精神を忘れずに課題に立ち向かっていきましょう。そう、闘う農民のひとり、シュマイザーさんの講演会が6月の28日の熊本を皮切りに列島を縦断して行われます。モンサント社と「生物特許」の侵害の罪でたたかっています。ひるまず、闘う勇気を得るために多くの方の参加を願っています。

[注]コーデックスBT部会=コーデックスバイオテクノロジー応用食品部会

GM 米反対と 有機農米消費拡大のための運動

韓国・女性民友会生活協同組合

朴林晟雅(パクイムソア)

2001年2月26日、韓国のある日刊紙が、「スイスで開発された遺伝子組み換え(GM)農産物である『黄金米』が、米の主消費国のひとつであるアジアのフィリピンに上陸した」と報道しました。全世界の米の90%がアジアで生産され消費されています。このように大部分のアジアの人々が米を主食にしているために、多国籍企業はGM米を携えてアジアの大規模米市場を狙っています。これはまさに、米を主食にしている大部分のアジアの人々がGM米の危険に曝されているということです。

韓国ではまだGM米が市中に流通している状況ではありません。しかし、政府機関である農業科学技術院といくつかの大学でGM米の実験栽培が進行中です。現在実験されているGM米は、除草剤抵抗性(bar) 光合成能力向上(AGP) 高アミノ酸成分向上(DHPS) 害虫抵抗性(GNA) 白葉枯病抵抗性(GO) 軟腐病抵抗性(AMP) 耐乾性(KRG2)などです。まだ正確な市販予定はありませんが、今後数年内に市販される可能性が高いため、韓国女性民友会生協をはじめとする韓国の各市民社会団体は、GM米開発賛否の動向を厳しく監視しながら、これからもいっそう反対の声をあげていきます。

また利潤だけを追求する多国籍企業が流通過程でどんな不正を働いているかわかりません。

韓国では2001年度、消化障害、アレルギーなどの副作用のために食用が禁止されている工業用「スターリンクとうもろこし」(GMとうもろこし)が食用として流通し社会的問題になりました。

このように危険なGM米が市中にそのまま流通することになれば、ヨーロッパに比べてGM食品の危険性に対する社会的認識が広まっていない韓国においてはその被害は甚大なものになるでしょう。

韓国女性民友会生協では、GM米に反対しながら、消費者が安心して食べることができる有機農米消費を拡大させるために、米を「世界を変える生活材」に選定して、アイガモ入植支援金募金、米買取資金募金など、様々な方法で米消費拡大のためのキャンペーン事業を繰広げています。

世界を変える生活材：「世界を変える生活材」は、生活材を通して世界をみつめながら、現在進行している多国籍企業の世界化によって強要されている消費生活に反対し、生活材を購入する私たちの活動を通して世界を変えて行こう

と選定された生活材です。

米消費が増えれば農地が甦って環境にやさしい大地になり、食糧主権を守ることに繋がるという意味を組合員たちとともに共有しながら米消費拡大に力を入れています。

アイガモ入植支援金：有機農法のひとつであるアイガモ農法に使われるアイガモを買うためのお金を消費者が募金して生産者を支援します。(1口：アイガモの子1羽-1800ウォン=約180円)毎年5月には消費者が募金したお金で買ったアイガモを消費者が直接田んぼに放してやるアイガモ入植行事を行います。この行事を通して消費者と生産者はいっそう親しくなります。秋の収穫が終れば、すっかり大きく育ったアイガモは募金に参加した組合員にプレゼントされます。

米買取資金募金：韓国では農民たちが一年間育てた米を秋にいっぺんに売ります。韓国の特殊事情でしょうが、韓国の大部分の農民たちは、貸与金を受けて一年間農作業を行い、秋に米を売ったお金で返済するという形で農業を行います。

消費者たちが秋になる前に米買取資金を集め一括して米を買取ることによって、生産者の負担も軽くなり、有機農米の安定供給も可能になります。

2000年から始めて現在まで組合員の着実な参加で続いています。

「ぼくも農夫になったよ」有機農種初育成子どもキャンペーン：4月24日から5月22日まで韓国女性民友会生協では「ぼくも農夫になったよ」有機農種初育成子どもキャンペーンを行いました。

子どもたちが家で直接種物を育てながら、米の大切さや農作業のむずかしさ、それから生産の喜びを感じることができる機会を提供します。

これからも韓国女性民友会生協は、GM米反対と有機農米の消費拡大のために努力を続けていくつもりです。同じアジア人として、直面しているGM米問題をアジア姉妹会議の三団体が連帯して解決していきましょう。

ヴァンダナ・シバと私

生活クラブ・埼玉
専務理事 渡部 孝之

私がヴァンダナ・シバを知ったのは、人から勧められたある本がキッカケだった。丁度そのころ食を揺るがす出来事として「遺伝子組み換え作物」が大きな社会問題となっていた。日本生協連の「安全であり実用化に問題なし容認する」に対して、97年に生活クラブが打出した基本態度は「取扱わないことを原則とする」であった。

扱わないことを原則とする背景には、食の安全に止まらず「環境への影響」と「多国籍企業による食料支配」への不安があった。その時出会ったのが“緑の革命とその暴力”という一冊の本だった。

98年、遺伝子組み換え草の根会議ツアーがモンサントのお膝元であるセントルイス市で開催された。パネラー参加者にヴァンダナ・シバとあり迷わず参加を決めた。インドにおける「緑の革命」がアメリカの国家戦略のもと一企業による食料支配を遺伝子組み換え作物を武器に全世界に広めようとしている。もし、そのようなことがあればアメリカも含めた家族経営の農家は、インドの農民と同じ道を歩むだろう。そして、いつも大きな犠牲となるのは女性だと力強く語った言葉が今でも心に残っている。

99年、第2回遺伝子組み換え草の根会議ツアーがインドで開催され続けて参加した。インドでのヴァンダナ・シバの印象は、アメリカと同様に力強く訴える姿である。



今回、3度目の出会いとなった彼女の来日にあたりスケジュールを割いて生活クラブ埼玉の組合員

と交流会を開催することができ、非常に嬉しく思っている。

彼女のパワーと勇気は、どこから湧いてくるのだろう。そう思うほど元気で笑顔が素晴らしい女性だった。

休日の夜という時間帯にもかかわらず集まった組合員は改めてインドで、日本で、世界中で女性がパワーを集めて運動をすすめていく意義を共有できたと思う。

「赤の革命」に対して資本主義国家が対抗策として導入したのが「緑の革命」だった。食料不足に悩むインドにとって食料不足を解消し、国民に富をもたらすはずだった革命は、大量の化学肥料と農薬の使用により農家は借金地獄となり、地下水の多用により農地は塩害となり多くの農民が自殺した。また、先祖から受け継ぎ気候風土にあわせて改良した多くの在来種と循環型農業も姿を消していった。「緑の革命」は自然の生態系と生物多様性などにおける多くの文化、歴史を知的所有権という暴力で奪い同時に姿を消した。後に残ったのは、荒廃した農地と遺族だった。

モンサントと愛知農業試験所が商品化を進めようとした「祭り晴」や新たに北海道・岩手で進められているGMイネの実験栽培は、日本における「緑の革命」そのものであり、インドの脅威が蘇るものである。

運動を力強くかつ継続的に広げる真の草の根グローバル化の価値を改めて確信する。ヴァンダナ・シバのメッセージを埼玉で組合員と共に活動に変えて前進していきたいと思う。日本中で、またアジアでの運動の連帯が強まることを心から願っている。

編集後記：三者の共通テーマ「私たちの考える協同組合の価値と原則」を目下女性委員会で検討中。9月に各単協に呼びかけてプレフォーラムを企画予定です。乞うご期待！（S）